

「東京新聞」の「平和の俳句」8月分から紹介し、感想を書きたい。「シベリアで拾いし命七十年 佐藤三郎（94歳）」<金子兜太 九十四歳の作者は、今次大戦のシベリア抑留での苛酷な体験に耐えた、お一人である。生きて帰国して七十年。平和こそ宝。> 94歳の佐藤氏はシベリアでどんなにか苦労されたのであろう。シベリアに抑留された時はまだ若く、上官もいたが、700人の部隊の責任を負う務めを命じられた。彼は食事を公平に分配することを条件に、その任務を引き受けた。上官から嫌がらせを受けたが、部下からは慕われ、その部隊は一人の死者も出さなかったという話を聞いたことがある。

「夏風や僕らはみんな生きている 鳶田（しまだ）瑛佑（えいすけ）（17歳）」<金子兜太 これだけのことではないか、と言う人もいるだろうが、違う。高校二年の作者は、今の「平和」をこころから謳歌（おうか）しているのだ。> 17歳の鳶田君は平和を謳歌し、精一杯青春を楽しんでいる。こんな嬉しく、素晴らしいことはない。後期高齢者になった私は戦場に行くことはないだろうが、小さな子どもを見る度に、この子らが大人になった時、どんな社会になっているだろうかと思ってしまう。断じて、戦場に行かせてはならない。

「そんなことで俺が黙ると思ったか 長沼通郎（みちお）（42歳）」<いとうせいこう 私黙らない、あなたも黙らない、彼女も彼も黙らない。まず過去が黙っておらず、未来からの声も聞こえてくる。倫理を守れ、と。> まるで、ケンカ腰である。しかし、沈黙は時の流れに同意の意志表示をすることである。民主主義は声を集めて進めるシステムであることをしっかり認識したい。民の声を聞かない政治は民主主義ではない。辺野古新基地建設反対を選挙で意思表示した沖縄県民の民意を無視する安倍政権は民主主義の根幹をないがしろにしている。

「平和の俳句 戦後71年」の「記者の『一句』」から。「殉教を叫ぶ父おり憲兵来る 佐藤頭子（76歳）」戦時中、キリスト教会の礼拝には憲兵が来て、メモを取っていた。先日、牧師であった岳父の記念会をした。岳父の友人の息子さんも「父の礼拝には必ず憲兵が来ていた、大学卒の友人たちは士官になったが、父はわざと白紙を出し、二等兵で招集された」と、牧師の父の生涯を思い出し、涙を流された。

「偏屈な我は反戦ねじれ花 手塚立夫（69歳）」反戦・平和を訴えることは偏屈ではなく、当然である。偏屈に見られる今がおかしい。だから「まさか今戦争反対さげぶとは 鈴木節子（67歳）」と詠う。憲法九条があるから平和は当然であり、誇りであった。今さら、戦争反対を叫ばなければならなくなった世を嘆く。

「戦友が生きたかったと蝉時雨 新倉泰雄（64歳）」蝉時雨を聞きながら、生きたかったけれど、戦火に散った友の声を重ねている。「敗戦で命繋いだ特攻の父 種歸秀雄（66歳）」生き残った父も、申し訳ないと生きづらい世を送ったのではないか。再び、そんな社会を来させてはならない。

「琉球新報から 平和のうた」から。「慰霊の日果てて果てなき有刺線 田港光子（75歳）」涙を流して慰霊の日を過ごした。しかし、米軍基地の有刺線は延々と張り巡らされている。その有刺線に「米軍、出ていけ」と、本音のポスターが張られている。「色褪せし学徒の遺書や夏深し 旭文子（76歳）」学徒たちが書いた遺書は70年以上経っているから、当然、色褪せる。私は「無言館」に三度、行った。家族への愛、恋人への愛は見る度に切なく、彼らの死の残酷さを思う。書き残した遺書は色褪せているが、反戦・平和のメッセージは変わることがない。